



# 東北大学史料館

## だより

# No.12

2010 Mar.

### TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



#### Index

- 2 金起林と仙台、  
そして「海と蝶」  
国際文化研究科 佐野 正人
- 6 資料の公開について
- 7 史料館のうごき
- 8 お知らせ



- 上 東北大学川内教養部南門  
昭和50年
- 左下 東北大学川内教養部南門  
昭和60年
- 右下 現在の川内北キャンパス  
南ゲート

## 川内北キャンパスの顔

川内北キャンパスは第二次大戦後米軍のキャンプ地として使用されていました。その後、東北大学のキャンパスとなりましたが、当初は米軍の残した建物を転用していました。また、市民の希望もあって、門も塀もない「開かれた」キャンパスでした。しかし、その後防犯などの理由で金網で囲われることになりました。上の写真は、昭和50年度入学試験の時のものです。当時、北キャンパスには教養部が置かれていました。門らしい門はまだありません。「東北」大学にはおよそふさわしくない、南国風の植物が高々と目立っています。金網の囲いはその出現が唐突であったこともあって、管理の象徴ともみなされたようです。

少なくとも美的観点から問題があったことは確かで、入試に訪れた受験生が北キャンパスの余りの貧弱さに入学意欲を削がれるというふうなうわさもありました。左下の写真は、昭和60年のもの。世間並みの、あまり特徴も威圧感も無い低めの塀と門が設けられています。

右下は現在の北キャンパス南ゲートです。門柱の「東北大学」の文字は、片平キャンパス正門門標と同じ書体、入口としての機能性よりも、記念碑的性格の濃厚な門です。塀の存在感は抑えられていて、再び「開かれた」キャンパスを強調しているようです。この川内北キャンパスの「顔」は、訪れる人々にどのような印象をあたえるのでしょうか。

キムギリム  
金起林と仙台、そして「海と蝶」

東北大学国際文化研究科准教授

佐野 正人



仙台で勉強したアジアからの留学生としては魯迅のことがよく知られているが、その他にもアジア各国から留学生が来ていたことはあまりよく知られていない。中でも朝鮮からは少なからぬ数の学生が来ており、その中には帰国後様々な方面で活躍した方々もいる。現在の韓国では文学者として有名な金起林（キム・ギリム、1908～1950?）もそのような東北帝大出身の留学生の一人であった。

金起林は、韓国ではとりわけ知性的な詩人・評論家として知られている。I.A. リチャーズなどの西欧モダニズムの潮流を吸収し、1930年代の朝鮮文壇に詩作と評論との両面で新風をもたらした存在であった。1933年には九人会という朝鮮のモダニズム文学者の団体を結成しており、30年代の朝鮮におけるモダニズム文学の発展に大きく寄与した。また、『朝鮮日報』での記者を長くつとめており、ジャーナリスティックな感覚が彼の詩や評論にも窺われる。1945年に植民地から解放された後はソウル大学・延禧大学（現在の延世大学）などで教壇に立ち、朝鮮において科学的な詩論を確立すべく奮闘した。1950年の朝鮮戦争の勃発とともに北朝鮮の人民軍によって拉致され、その後の消息は分かっていない。長いこと北朝鮮に自ら越境したと見なされて彼の名は韓国の文学史から抹消され、その著書も発禁処分となっていたが、1989年の解禁処置によってようやく自由にその著書が読めるようになり、その後20年間で急速に研究・再評価が進んでいる。生誕100年を一昨年に迎えた彼の著作は、2009年に初めて日本語に訳され『朝鮮文学の知性 金起林』（青柳優子訳著、新幹社）として刊行された。

『朝鮮文学の知性 金起林』には充実した評伝と解説が付されているが、日本の読者にとって興味深いのは彼が2度にわたって日本留学をしている点である。1度目は東京の日本大学へのものだったが、2度目の留学として1936年から39年まで東北帝大英文科に留学している。彼が28歳から31歳にかけてのことである。『朝鮮文学の知性 金起林』の評伝においても仙台留学に関しては重点を置いて描かれているが、その留生活の詳細はあまり分かっているとは言えない。「鍛冶屋前十四戸田方」に下宿したことが学生名簿から確認できるが、片平キャンパスのすぐ近くであり、魯迅の下宿ともほど近い場所に住んでいたことが分かっている。余裕のある時には「散歩、シネマ」を楽しんだことも評伝に記されており、おそらく休日には広瀬川辺を散策したり、映画を見に一番町の映画館へと足を運んだことだろう。卒業論文は「I.A.Richards' Theory of Poetry」というタイトルだったが、論文の実物は残念ながら確認されていない。

金起林が留学するに当たっては東北帝大と早稲田大学との両方から入学許可をもらった後、東北帝大を選択したという事情もあり、なぜ彼が東北帝大を選択したのかは興味深い問題である。おそらく魯迅もそうであったように、多くの留学生がいて何かと雑用に追われることの多い東京の地を避けて閑寂な地方都市を選んだというのが実情に近かっただろう。

ただし、彼が仙台について良い印象を持ったか、どういう心情で暮らしたかについてはほとんど分かっていない。彼は多くの著作を残したが仙台について、あるいはそもそも日本生活に関する著述はきわめて少ないのである。これは二度にわたって日本留学をした者としては不自然なものであるという印象を与える。例えば文学的に見ても日本の文学や作家・詩人についての論及はほとんど見られないのである。このことは金起林にとっての「日本」というもの、ひいては植民地期の朝鮮文学者にとっての「日本」がいったい何で

あったのかという問題を考えさせるものである。

おそらく金起林にとっての「日本」とは学ぶべき近代や近代文学への通路ではあったが、しかしそれ以上に日本文学、日本文化そのものに価値を認め深く探求するという種類のものではなかったということなのだろう。普遍的な「近代」の価値の追求に当たって、便宜上選んだ場所ということもできよう。

彼の仙台時代の心情を窺わせる詩が一篇残されている。「東方紀行」連作中にある「仙台」というタイトルの詩である。

#### 仙台

このうんざりする梅雨がいつ明けるのかと 天気予報ばかりめくっている日  
捨ておかれた鉄筆が筆立てに少し斜めにはいつて錆びている

支柱になりたくはなかったのか

翼になりたくはなかったのか

銃をうちまくりたくはなかったのか

錆びた鉄筆をくわえ 噛みちぎり噛みちぎり

窓の外のしかめ面をした長雨を横目でにらむ朝

新聞にはまた隣国で動乱が起きたという

(青柳優子編著『朝鮮文学の知性 金起林』(新幹社)での訳を転載。)



(金起林肖像 東北大学史料館所蔵)

詩の中で「錆びた鉄筆」とは記者時代を回想しながら、記事の筆を取らなくなって久しいことを言っているものだろう。全体的にこの詩は梅雨のうとうしさと言ひ、鉄筆を噛みちぎる描写と言ひ、隣国での動乱と言ひ、何か鬱屈するような彼の心情が読み取れるようである。1936年から39年と言えば、日中戦争が一路拡大する時期でもあって、そのような現状に彼が暗澹たる心情を抱いていたことは想像に難くない。「支柱になりたくはなかったのか／翼になりたくはなかったのか／銃をうちまくりたくはなかったのか」というリフレインは、この詩の中で異彩を放っている部分であるが、何か感情を刺激するような事情がそこにはあったものと想像される。想像をたくましくすれば、故郷朝鮮での知人の不幸などの消息に接して、このようなリフレインははさまれたのではないだろうか。

金起林は1939年の3月に東北帝大英文科を3年がかりで卒業して、京城に戻っている。すぐに『朝鮮日報』の記者に復職し、学芸部次長となっている。日本留学中、中断されていた創作活動も再び再開され、活発に詩を発表し、1939年の9月にはそれまでに発表した詩を集めて第2詩集『太陽の風俗』を刊行している。

詩人として学芸部記者として脂の乗りかけていた金起林にとって不幸だったのは、帰国した年に第2次世界大戦が勃発し、日本でも日中戦争の激化に伴って戦時体制が厳しくなっていた時期に当たっていたことだった。朝鮮でも皇民化政策と呼ばれる、創氏改名や朝鮮語の禁止、神社参拝、徴兵制の施行などの一連の政策が1940年頃から矢つぎ早に取られるようになり、金起林の『朝鮮日報』もまた1940年に強制的に廃刊されてしまう。文学者たちも戦時体制に協力を迫られ、多くの詩人たちは日本語による戦争協力詩を書くようになるのだが、金起林は最後まで日本語による創作は行っていない。1942年には故郷の咸鏡北道に戻り鏡城高等普通学校の英語教師となって、それ以後1945年の終戦(解放)に至るまで一切詩や評論活動は行われていない。時局に迎合するのを良しとせず、むしろ沈黙を守ったものと見ることができる。

ところで、日本留学から帰国して創作活動を始めるのに当たって最初に彼が発表したのが「海と蝶」という詩であった。この詩は後に第3詩集『海と蝶』のタイトルともなっており、また現在韓国の国語の教科書にも収録されて金起林の代表作とされている詩である。この詩には、彼の日本留学とそこからの帰国という個人的な体験が投影されているのではないかと見られる。この詩の中心となっているのは、「海」を渡っていく前の無垢な状態と「疲れ果ててもどって」きた帰還の後の対比である。

海と蝶  
誰も彼に水深を教えたことがないので  
白い蝶は海がすこしも怖くない

青い大根畑とおもって飛んでいったが  
いたいけな羽は波に濡れ  
姫君のように疲れ果ててもどってくる

三月の海は花が咲かずやるせない  
蝶の腰に真っ青な三日月が凍みる

바다와 나비  
아무도 그에게 수심 (水深) 을 일러준 일이 없기에  
흰나비는 도무지 바다가 무섭지 않다.

청 (靑) 무우 밭인가 해서 내려갔다가는  
어린 날개가 물결에 절어서  
공주 (公主) 처럼 지쳐서 돌아온다.

삼월 (三月) 달 바다가 꽃이 피지 않아서 서글픈  
나비 허리에 새파란 초생달이 시리다

(青柳優子編著『朝鮮文学の知性 金起林』(新幹社)での訳を転載。)

第1連では「彼」が海に向かって飛んでいくに当たって、海の水深も教えられたことがなくそこがどんなに危険なものであるかも知らない状態であったことが歌われている。無知であるとも読めるし、純粹であるとも取れる。それに対して第2連では、「いたいけな羽は波に濡れ」「姫君のように疲れ果てて」戻ってくる帰還の姿が対比的に描かれている。ここでも弱く純粹な蝶のイメージは強調されているが、それよりも過酷な飛行であったことがより強く印象に残るようになっていく。それは、純粹で無垢であったはずの「白い蝶」が、波に濡れそぼり、疲れ果てた状態で帰還していることによっている。その間には長い飛行＝航海の道程がはさまっていたであろうし、その間に経なければならなかった多くの困難と現実の過酷さがあったことが読み取れる。青春を暗示していたとも読める第1連に対して、第2連では現実の過酷さに直面し苦い認識に達した成人期が暗示されているとも読めるだろう。

第3連では飛行からもどってきた「白い蝶」の眼に映る風景が描かれており、いわば帰還後の「白い蝶」を描いている。三月の海はまだ寒く、花も咲いていない。ここには三月に東北帝大を卒業し日本から朝鮮へと玄界灘をわたって帰還した金起林自身の体験が投影されていることだろう。そこで彼が3年ぶりに見た植民地の朝鮮の現実に対して「やるせない」思いを抱いたことは想像に難くない。最後の行「蝶の腰に真っ青な三日月が凍みる」はもっともこの詩で印象的な行だが、青い三月の海を背景に、真っ青な三日月の光を浴びて飛ぶ白い蝶の姿は、幻想的な雰囲気をかもし出している。しかしその姿はどこか痛々しく悲壮なイメージを呼び出させないだろうか。おそらくそれは「真っ青な三日月」の光が与える細くて寒々しいイメージによっているだろう。その三日月の光は、蝶の腰に「凍みる」のである。光が映えるとか反射するのではなく「凍みる」と歌われたところに、金起林の心情は投影されている。前の行での「やるせない」思いとともに三日月の光が凍みると感受されたところに、彼の帰還に当たっての心情は象徴されていると考えられる。

このように「海と蝶」の詩を読んでいくと、金起林の帰国に当たっての心情はほぼ察しがつく。いまだ植民地状態にあり、むしろ3年前の留学以前よりも戦時体制が強化されつつある朝鮮に対して、彼がやるせない寒々しい思いを抱いたことは想像しうる。もちろんその思いを直接に歌うことは植民地下の朝鮮ではできなかったから、「白い蝶」に託して象徴的あるいは寓喩的にうたわれたのだと思われる。そこには、現実の苦さや、幻滅と言った気分がむしろ支配的であり、待ち受ける過酷さへの予感のようなものが読み取れた。

戦前には多くの日本人が同様に欧米への留学の道に上ったが、彼らが帰国に際して感じたであろう感情と、金起林の帰国に際しての心情とを対比して見るのも興味深い。日本人の帰国も苦い認識を伴ったものもあつただろうが、それよりも故国への帰還ということは安らぎや安堵感をもたらしたはずである。それに対して植民地朝鮮の知識人たちは、疲れ果てた白い蝶に託するほかない心情を抱えて帰国していったのである。そこには母国への錦を飾るといような成功感や昂揚する気分は感じられない。金起林にとっての留学、そして日本とはそのようなものだったのである。

## 企画展 マンボウ青春記の仙台－北杜夫と東北大学医学部－

会期 平成21年(2009)9月10日(木)～11月13日(金)

史料館では東北大学の歴史に関して、明治の学生群像(2006年)、学徒出陣(2005年)、教養部(2008年)などを取り上げて展示を行ってきました。そうした蓄積を生かしつつ、今年度は、昭和20年代の東北大学を取り上げてみました。

戦後の東北大学の卒業生は、アカデミズムの世界では著名ながら、一般の知名度はごく低い例が多いようです。そうした中で北杜夫(1927～)は、日本を代表する歌人・斎藤茂吉の次男で、本人も芥川賞作家として知られ、さらに「どくとるマンボウ」シリーズで一世を風靡した存在でしたが、長く東北大学との関係が論じられることは稀でした。「北さん」が卒業後のほとんどを東京で活動し、仙台との縁は薄かったことによるのでしょうか。しかし、比較的史料の乏しい戦後の東北大学について、北さんの著書『どくとるマンボウ青春記』に描かれたことで、私たちは当時の様子について多くを知ることができるのです。そこで、同書の記述を利用して、その時期の主に医学部の教員や学生たちを中心とする展示を企画してみました。

会期中、昨年に続き土日祝日開館を実施し、来場者は2054名でした。また、関連企画として次の4つを実施し、好評を博しました。御協力頂いた各位には、改めて感謝申し上げます。



### (1) 講演会

日時：9月12日(土) 14:00～16:00

講師：斎藤 由香氏(エッセイスト・会社員)

演題：どくとるマンボウ家の素顔

会場：金属材料研究所講堂(入場149名)



### (2) 演劇上演

日時：10月4日(日) ①11:00～ ②14:00～

出演：NPO 法人劇団仙台小劇場

演題：セリニアンの隠者 ときめく春の宵－どくとるマンボウの仙台－

会場：法科大学院第4講義室(入場51名)

### (3) 展示ガイド

日時：10月24日(土) 14:00～16:00

講師：曾根原 理(史料館)・石垣 政裕(経済学研究科)

演題：展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」

会場：法科大学院第4講義室(入場10名)



### (4) 映像上映

①「北杜夫代表作『楡家の人びと』の誕生」(世田谷文学館より借用)

②「北杜夫を語る」(関本英太郎東北大学情報科学研究科教授を中心に制作)

(曾根原 理)

## 資料の公開について

史料館では、公開準備が完了した資料の目録をホームページ上で公開しています。平成21年（2009）9月以降22年3月までに目録を公開する予定の文書は以下の通りです。

### ●法人文書

旧学生部移管文書：戦前分38冊（件名数：361件）

大正11年の法文学部設置に伴い新設された「学生監室」、および昭和3年にこれを改組して誕生した「学生課」の事務文書。文部省との各種の往復文書や他大学学生課担当職員との協議会の議事録、思想問題対策として文部省から各大学に配布された「訓育費」関係の書類などが含まれ戦前期の大学の学生政策やその実態をうかがう貴重な資料である。一部は件名での検索も可能。

規程関係書類123冊（件名数：2633件）

東北帝国大学創立以来の各種学内規程の制定に関する決裁文書を部局単位で編修したもの。ただし明治・大正期の規程類は当初は別な形で編修され、昭和に入ってから数次にわたり編集し直され現在の形となった模様である。昭和50年代までの文書が移管されており、本学における組織や規程の変遷を跡づける際の基本となる資料である。件名での検索が可能。

新制大学設置関係文書3冊（件名数：184件）

戦後学制改革に伴う新制大学への移行のあり方を検討した「学制審議委員会」をはじめ、新制大学移行に関する各種会議の議事録等。旧制高校や専門学校・師範学校等との合併に関する協議の推移、新たに発足する教養部カリキュラムの検討過程など、東北大学における新制大学移行にかかる経緯を跡づけることが出来る基本資料として重要である。件名での検索が可能。

評議会議事録（第二次公開）10冊（件名数：115件）

評議会は、2004年の国立大学法人東北大学発足以前においては、東北大学の最高意思決定機関であった。今回の公開は2008年度の第一次公開に続く、昭和21年度から30年度までの分の議事録を対象にしている。敗戦直後の大学の復興や、新制大学への移行などといった激動の時代における東北大学の姿を知ることが出来る基本資料。件名での検索が可能。

### ●個人文書

大島正隆文書 287点

大島正隆（1909～1944）は、東北帝大の卒業生で、東北中世史研究の開拓者として知られる歴史学者。思想問題により旧制二高を中退したが、検定試験を経て東北帝大に入学し国史学を専攻。昭和14年（1939）に卒業後は副手となった。東北各地の中世資料を採訪し、また柳田国男に学んだ民俗学を活かして独自の業績を挙げた。敬虔なクリスチャンとしても知られる。資料は、①フィールドワークの成果である大量の調査メモや手帳、②読書メモ、受講ノート類、③登山活動やキリスト教信仰の様子を伝える身辺資料等からなる。



小林好日文書 139点

小林好日（1886～1948）は、1934（昭和9）年から1948年まで東北帝国大学に在任した国語学者。文法論・文法史をはじめ国語学全般にわたる業績を残し、また東北地方方言の調査成果も高く評価されている。資料のうち、東北帝国大学での講義ノートや日頃の研究ノート、東大の卒業論文（写真右）、書き入れのある著作・原稿などは、近代国語学の成立期から確立期にかけての国語学研究の状況をうかがうことのできる貴重な資料。また東大在学中の受講ノート（心理学、美学美術史、歴史学等）は、近代学問史の実態を映し出す貴重資料。





## 史料館のうごき (2009.9～2010.3)

### ○かたひらまつり2009の開催 (2009/10/10～11)

10月10日(土)・11日(日)の二日間にわたり、恒例の「片平まつり2009」(東北大学附置研究所一般公開)、および第3回東北大学ホームカミングデーが開催されました。当館では常設展示や企画展示に加え、片平たてももの応援団の協力により「片平たてももの見学ツアー」を企画し、①「本多・モーリッシュ博士コース」(旧理学部・金属材料研究所方面)、②「魯迅・土井晩翠コース」(旧二高・仙台医専・法文学部方面)、③「八木博士とアインシュタインコース」(旧工学部・仙台高工方面)の3つのツアーに合計51名の方にご参加いただきました。



### ○「安井曾太郎の肖像画」展に「玉虫先生像」を出陳 (2009/10/31～2010/1/17)

安井曾太郎の代表作のひとつとして知られる「玉虫先生像」(旧制二高第8代校長玉虫一郎一の肖像)が、東京・ブリジストン美術館で開催されたテーマ展示「安井曾太郎の肖像画」展に出陳されました。



### ○大学生協文レク企画

#### 「東北大学史料館見学と片平キャンパス散策ツアー」(2009/11/21)

毎年恒例の東北大学協組組合員を対象とした「文レク企画」として、「東北大学史料館見学と片平キャンパス散策ツアー」と銘打った片平キャンパスの見学会が行われ、小雨の降る中、片平キャンパス内の、学都の歴史を伝える史跡を訪ね歩きました。

### ○第32回大学史研究セミナーの開催 (2009/12/5～6)

12月5日(土)・6日(日)の両日、「第32回大学史研究セミナー」(大学史研究セミナー)が東北大学史料館(法科大学院講義室)を会場に行われました。第一日には、金子勉(京都大学)・黒川修司(東京女子大学)・羽田貴史(東北大学)3氏によるシンポジウム「学問の自由と大学自治—ドイツ・アメリカ・日本—」が、二日目には個人研究発表と史料館の見学会が行われました。

### ○新収・新公開資料速報展示 (2009/12/7～)

企画展終了後の12月7日より、第7回新公開資料速報展「100年前の留學生活と科学者たちの交流—真島利行文書の絵はがきコレクションから」を開催し、本学有機化学の初代教授真島利行所蔵の絵はがきを通じて当時の科学者たちの留學生活や交流のあとを紹介しました。今後も公開準備が整った資料を順次このような形で紹介していく予定です。

### ○全国大学史資料協議会主催 全国大学史展「日本の大学—その設立と社会—」 (2010/1/15～2/14)

2010年1月15日(金)から2月14日(日)まで、わが国における国・公・私立様々な大学の「創立」をテーマにした標記の展示会が、明治大学駿河台キャンパスで開催され、当館からも、創設時代の学生たちの姿を映し出す写真資料を出陳しました。

### ○「星寮のおひなさま展」の開催 (2010/2/18～3/12)

2006年より行っております、看護婦寮「星寮」や大学病院で昭和初期以来多くの人々の目と心を慰めてきた、「星寮のおひなさま」展を、今年も2階展示室において開催しました。

## 常設展示 歴史のなかの東北大学

史料館2階展示室では、常設展示「歴史のなかの東北大学」を行っています。キャンパスの今昔の風景、戦前・戦後の学生生活、東北大学で活躍した学者たちの営み、女子学生や留学生たちの様子など、さまざまなテーマから在りし日の大学の姿に迫ることができます。また第二高等学校・仙台医学専門学校・仙台工業専門学校・宮城県女子専門学校などの戦後東北大学に包摂された学校についても、写真パネルや資料で紹介しています。動画や音声資料を視聴できるコーナーもあります。入場は自由です。ぜひ、おいでください。

毎週月曜日～金曜日（休館日は除く）午前10時～午後5時（4時30分までにご入館下さい）入場無料



### 史料館ガイドブック「歴史のなかの東北大学」「魯迅と東北大学」

史料館常設展示の内容を、ビジュアルなガイドブックにまとめました。

「歴史のなかの東北大学」(A5版32ページ：300円)

「魯迅と東北大学」(日本語版／中文版 A5版16ページ：260円)

史料館の来館記念としてはもちろんのこと、東北大学の歴史の概要を知るためにもお使いいただけます。東北大学生協各店舗でお求めください。



### 資料の収集にご協力をお願いします

東北大学で活躍した教職員、東北大学で青春を過ごした学生たちの歴史を豊かに伝える「東北大学校友アーカイブズ」構築のため、史料館ではかつて本学にご在学・ご在職された方々、本学にゆかりのある方々に、お手許にある本学の歴史や学生生活に関わる資料のご提供をお願いしております。ご協力をいただける方は、当館までご連絡をお願いいたします。

**収集資料の例** 本学での学生生活に関わる資料（各種学生団体の記録や印刷物、学生服・制帽など）  
 本学での教育研究活動に関わる資料（講義ノート、大学運営に関する各種の記録など）  
 本学に関する映像資料（写真、ビデオテープ、その他）

東北大学史料館だより 第12号 2010年3月12日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 tel 022(217)5040

E-mail desk-tua@library.tohoku.ac.jp URL http://www2.archives.tohoku.ac.jp/